

交錯する人と記憶——朝鮮混住地における植民地経験——

鈴木文子

〔抄録〕

本稿では、植民地後期の朝鮮半島において、地方の混住地に居住した主として日本人を中心に、周辺に居住した朝鮮人のライフストーリーとも比較しつつ、その他者像、植民地経験を考察する。日本人の植民地認識の欠如は、二重都市論、すなわち分離居住による非省察性が要因とされてきたが、混住地においても、独自の

ネットワークが形成され、他者を認識することが困難であったことを示す。また、人々の「体験的実感」と植民地の構造のすれ違いを考える。

キーワード 朝鮮半島、植民地経験、混住地、在朝日本人、
体験的実感

一 はじめに

本稿は、日本帝国下における植民地を平凡な日常を生きる人々がどのように認識し、記憶してきたかを、特に朝鮮半島の一地方の混住地に居住した日本人（いわゆる在朝日本人）と周辺村落にいた朝鮮人¹という異なるポジションナリテイにいた人々の主としてライフストーリーをもとに考察するものである。

政治史とは異なる市井の人々の植民地への関与に関心をおく在朝日本人研究は、梶村秀樹を嚆矢（一九九二）とし、企業家の移動などを

分析した木村健二、「草の根の侵略者」と呼んだ高崎宗司の通史的研究以降²、二〇〇〇年代になって韓国においても盛んになっている。帰還者の記憶、語りが日本に与える影響、あるいはその語りそのものが、日本人の植民地観として関心を持たれているためである³。また、研究者以外でも、一九九〇年代後半からの慰安婦問題など歴史認識をめぐる論争が盛んになる中、一九七〇年前後から散見されたという帰還者たちの回想録や伝記などの出版物も日本で再び目に付くようになった。その中には、拙稿でも指摘したが、研究者が記述する「日帝」時代に対する違和感、「搾取」「収奪」といった言葉と生活者の植民地経

験、実感との温度差、乖離を強調するものが見られ、かつて梶村が出会った元地主一族の言説と通底する所がある。植民地期の大地主不二農場の家族は、「米の収奪」と研究者が示す状況は、「雑穀好みで米を好まない朝鮮人を知らない」机上の学問だと述べ、「体験の実感」にもとづく植民地支配肯定論だと梶村を激怒させる^①。農村で聞き書きをすれば、白米が如何に羨望の的であったかは、後述するように明らかである。しかし、梶村が虚像として否定したこのような「実感」や「善良な日本人」像の実態の理解が、植民地認識においては重要とした咲本和子の指摘は重要である。同氏の京城女子師範卒業生への調査は、筆者の関心と共通し先駆的であるが、教員に限定されたものであった。また、支配者と被支配者であった民衆相互の関係を、両者を対象にアプローチした研究は少ない。崔吉城は、日本人の移住漁村であった巨文島でのフィールドを踏まえ、「植民地期を体験した人間よりも解放後生まれの方が反日感情が強い」と歴史認識とポストコロニアル状況との関係を示唆する指摘をしている。しかし、そのインタビュー資料の分析では、日本人居住地の朝鮮人は、被雇用者が多く、地元の有力量者がいた両隣の島とは対立していたことが示されており、同地域の同時代の人々であっても一枚岩ではないことがわかる^②。いずれにせよ、研究者の分析が、「空論」であるならば、当時生きた人々による植民地地とはどのような「実感」を伴うものであるのか、多声的データの収集が重要と思われた。

ところで、植民地期の在朝日本人は、一九四二年のピーク時にあって朝鮮全人口一六三六万人の二・八五%（約七五万人）に過ぎなかつ

たが、その約六割が「府」といわれた大都市に居住し、朝鮮人と日本人は分離した居住空間にいたことがこれまで度々指摘されてきた^③。この二重都市論が、日本人の朝鮮に対する植民者的偏見や人種観を生成する一因とする分析もある^④。しかし、近年この分離居住論は、実態というより心象地理的な風景であったという指摘がある。京城（現ソウル）では、両者が共存する雑居地が一九三五年の統計で四七%あり、親しい交流など多様な関係が等閑視されてきたという^⑤。しかし、先行研究は、学校文化を通じたものが多く、コミュニティの中で日本人と朝鮮人の関係がどのようなものであったかという事例の検討は少ない。筆者は、これまで朝鮮半島各地で植民地期を過ごした主として日本人三五名、韓国人四名から、その植民地経験に関するライフストーリー調査を行ってきた。本稿では、フィールド地域の中で混住地であった忠清南道保寧郡大川面大川里（道は日本の県、面、里も各々その下位行政区分に相当）という地方の市街地、及びその周辺の圧倒的に日本人が少なかった農村の事例から、日本人と朝鮮人との関係を考察する^⑥。混住の有無にかかわらず、いかに日本人が他者を理解することが、困難であったかを示す。同時期を生きた、周辺村落にいた韓国人の人々の記憶と比較しつつ、双方の植民地経験の同異を示し、植民地認識のずれの要因も考察したい。口述資料を中心としたのは、庶民の視点からの植民地観を知りたいということと、回想録などでは曖昧な行間の意味や、個々人の経歴・居住地の環境など、植民地経験のファクタとなりえる情報を、インタビューメントとの対話によって知ることができ、そのためである。また、時間的制約があり、その境界的な状況のなかで、

まずは収集しておくことも重要であると考えた。ただし、本資料は、インタビュー時期(二〇〇九〜二〇一八)も多様であり、インタビューを重ねる中で、重要な点に気づき、その際にはすでに鬼籍に入られた方もあり、実際は十分とはいえないが、他地域のデータや同地帰還者の郷友会誌等関連資料も交えて補充したい。なお、口述資料であるため、主として、一九三〇年代以降の植民地後期の記憶でもある。

二 市街地に混住する人々

― 忠清南道保寧郡大川里の事例

1 街の概要

最初に取り上げる混住地、大川面大川里は、一九一四年に新規合併した保寧郡に属し、郡庁、面事務所、警察署など官公庁がおかれることで創生された新市街地であった。李朝時代からの軍港保寧水營があった周浦面保寧里から郡庁は移設されたもので、併合後に中心地が移された典型的な事例のひとつである。保寧郡は、面積約五六〇平方キロ(約三五万里)、西海岸沿いで南北に長く、当時の産業誌などによれば、灌漑に適した土壌^⑩と海岸線に広大な干潟地を包含し、漁業や干拓による「開発」を期待された地域であった^⑪。南は群山、北は一部が仁川の商業圏に属した大川は、日本時代には郡内で最大の定期市も開催されていた。しかし、一九二〇年代までの旧大川漁港(セツケツケ…大川里南部)は、干満の差が激しく直接接岸できなかったため、大川里から西北二〇キロ離れた鰲川面鰲川港に朝鮮郵船の仁川、

木浦線の外部航路は寄港し、周辺離島の漁獲物もほとんど洋上か、潮流の関係で近隣の広川、長項で売買されていた。一九一九年以来施工されていた長項線(天安―長項)から分岐する形で京南鉄道大川駅が開設したのは一九二九年末である、保寧郡(現保寧市)一帯からの帰還者たちの親睦会「保寧会」の会誌によれば、総督府への陳情がかわず、地元住民の働きかけで設立された民間会社による鉄道だ^⑫。市内から約二キロ離れた大川海水浴場は、一九三一年軍人たちの保養地をめざし漁港開発とともに計画されたものだった。郊外の軍入りに漁港(現大川漁港)が完成したのは一九三五年である^⑬。植民地期も大田中学の臨海施設や青年団の修練所もあったが、今日でも学校の保養所や旅館を有する西海岸の代表的海水浴場である。

植民地期の人口の推移をみれば、保寧郡は併合当初の一九一〇年で日本人は、一四戸、三二人、同年京城では、すでに一一、二七五戸、人口三八、三九七人、北部の開港地である鎮南浦で一、一四六戸、人口四、一九九人いたが、保寧は、農村部へ後発に日本人が流入していった事例といえる。一九四〇年の保寧郡においても日本人は六〇〇人代で保寧全人口の〇・七%であった。面、里単位の民族別人口構成がわかる統計は少ないが、一九三五年には大川面には朝鮮人人口の一・八%(郡内最多)、一方日本人は全体の約七〇%が居住していた。かつ大川里の日本人は、面の日本人の約九一%を占めていた(朝鮮総督府各年統計)。民族別職業構成は、一九三二年の『保寧郡勢一斑』^⑭において郡レベルでのみ知ることができるが、日本人の第一次産業従事者は、一二・二%、工業一三・四、商業三二・六(全国各々七・二、

一四・八、二六・九%・『国勢調査』一九三五年）と農漁業が朝鮮半島の全日本人平均よりは若干高いのは、地域的特徴を反映している。また公務員・自由業が三九・七%と全国四二・五よりは下回るが、朝鮮人の二%（全国三・三%）、内地の公務員六・八%と比較しても、圧倒的にその比率は高く、地方の街場においても植民地的な職業構造を示している。ちなみに、当時の内地の日本人農業人口比率は、四二・六%であった。朝鮮へは初期には、移住漁民や東洋拓殖会社による農業移住が幹旋されていたが、農業移民は一部の地主層を除いて商業などに転職する者も多かったとされ、農漁業の有望地とされた保寧でもその傾向は同様であったことがわかる。

一方、朝鮮人に関しては、一九二五年～一九三五年までの人口増加率は、全国平均と変化がないが、一九三五年～一九四四年には全国一三に比べ七・二%に過ぎず、自然増の半数が他の都市へ移住していたという。¹⁷朝鮮農村の疲弊と産業構造の変換によって、全国的にも都市部や内地への労働力として農村人口が吸収されていったとされるが、これを市街地に焦点を当てると、大川里では一九二〇年においては、朝鮮人は一一〇戸、九四〇名、日本人は一〇〇戸、人口二六六名と¹⁸戸数は近似していたが、一九三二年には、朝鮮人四六一戸、二、〇九八人、日本人が一一九戸、四〇三人と戸数は日本人一・二倍に対し、朝鮮人は四倍に増加し、¹⁹朝鮮人の都市部への移動傾向が郡内の町場にも反映していたものと思われる。

このように移動の様相も日本人と朝鮮人では若干差異があったが、上述のように大川のインフラが整い、経済的發展が望めるように

なるのは一九三〇年代になってからである。それでは一九一〇年～一九二〇年までの初期の移住者たちはどのような目的で大川を選択したのであろうか。

2 大川里への定着

大川里の日本人インフォーマントの方々には、前述の「保寧会」を通して出会うことができた。二〇〇九年六月二日～五日保寧郡への旅行（約二〇名が参加）に同行させて頂き、その後、参加者やその他の会員の方のご自宅等で計十名の方にお話を伺った。大川は筆者の長年のフィールド地（離島）への中継地で、一九八〇年代後半より度々訪れている地域であった。また、筆者の前勤務地（島根県松江市）からの移住者がいたことを土地台帳で知り、植民地期に関心をもち契機ともなった。職場にも帰還者の親族の方もいる事がわかり、偶然も重なった。

インフォーマントたちは、一世たちの渡朝から大川へ至る経緯をおおよそ知っていたが、お話とともに、現保寧市庁（市役所）や韓国国立公文書館（大田市）に保管されている土地台帳を見ると、その移住の時期がある程度推測できる。以下の図の市街地のかかなりの部分を当初中野元三や南源五郎という人物が所有し、それをのちに多くの移住者たちに売却している。口伝では中野は元巡査で、台帳によれば周浦面新城里の住人であった。南は不明であるが、インフォーマントたちの記憶によれば、在郷軍人であったともいう。一九二〇年には、各々雑貨商と穀物商として大川に居住していたようだ。²⁰両者とも『朝鮮銀

『行会社要覧』などから忠南産業（農林、干拓事業会社）や忠南自動車運輸などの社長や理事を一九二〇年代に務めている。朝鮮人の土地所有者の場合は、洪城郡や青蘿面など近隣の農村居住者が購入しているが、日本人の場合、中野から京城の高橋久吉、群山、あるいは兵庫県居住者など他地や内地居住者へも売られていた。高橋は農場主として紳士録にも度々表れる人物で、周辺の島嶼地域も所有していた。土地調査事業によって国有となった土地を投資対象として購入し、他者に売却していたものと思われる。松江の老舗商人は、台帳と遺族のお話を総合すると、不在地主で、管理者に任せ時折来朝していた。大正年間に、朝鮮からの帰郷後に伝染病で死亡したという。親族が大川に居住し、農業に従事している。

大川の初期の土地所有者は、このように不在地主も含めた内外の投資家と、農業移民、および商人などの定住者に分かれていた。公務員は、いずれも一、二年の短期間滞在と思われる。一九一三年渡朝のA百貨店という雑貨店の初代は、「当初は金融業をするつもりで渡朝するが、失敗し雑貨業になった」と同郷誌（『保寧』1）に記している。同氏が同様の目的であったかはわからないが、併合当時、高利貸しをし、朝鮮人に貸せば担保にした田畑を容易に取得できると噂され渡朝する人間もいた。のちには、日本人居住者が三〇世帯ほどになり、生活も安定したと述べており、商店も当初は、ほぼ顧客は日本人を対象としたものだったようだ。のちの居住者たちは、郡庁や面役場の設置とともに、新たな町場を見込んで移住した人々と思われる。親族に呼ばれ、あるいは借金に困窮して同郷の知人を頼ってきたなど、移民

パターンのひとつである連鎖移住の場合もあったが、一世たちは多様な情報源をもとに各地から移動している。また、古参の定住者は、稼業とともに土地や貸家を所有、あるいは不動産の売買によっても生計をなしている人が多かった。戦中には、自給用の農地を所有していたため、米の配給は受けなかったという人がインフォーマントには多く、農村地帯にできた新市街定住者の特徴であったと思われる。

朝鮮人に関しては、当時市街地に暮らしていた人には会うことができなかつたが、その遺族や台帳、あるいは日本人の話から、後述のように、周辺の農村からの富裕層が、町場で精米所や農機具商などの商店経営者になる場合、医者、職人などの専門職あるいは、市場で食品関連の店等を営む人がいたようだ。

3 メンタルマップと記憶の中の大川

(1) 街の風景

「図」は、大川生まれの二世J30 f1931²¹の記憶をもとにJ24 f1931が市街地を描いたメンタルマップに、筆者が他のインフォーマントが記憶する内容を加筆したものである。凡例にある朝鮮人・中国人住居以外の商店は、すべて日本人の店である。民族別の区分は筆者が聞き書きによって記述したもので、業種が書かれているのは、原図では個人名であった。無記名の囲いは原図に合わせているが、空白の場所は、明確に名前が記憶されていないか空き地でもある。土地台帳や他の人が描いたマップを見ると、市場内も多少周辺に店舗か住居があり、牛市場やその西側（白地）、あるいは、A百貨店の南側

などにも宅地はあったようである。また、警察署や郡庁の西北、学校の北側はほぼ水田で、一部に住居があった。地図にはないが、北西にある、李文求の『冠村隨筆』（一九七七）という小説で有名になる「冠村」も大川里に含まれていた。川向うの「メンヨー牧場」とあるのは、郡の緬羊畜産試験場である。

市街は商店街と在来市場が共存していた。三と八の日に開かれる朝鮮の定期市には、チゲ（朝鮮式の背負子）を担いで品物を運搬する男の人や頭に「サバル（器）」をのせてくる女性たちなどが、各人の家へ行商にも来た。普段はトタン屋根だけがある場所に、店がだされ、肉や魚は日本人も買いに行った。「鶏や牛の足、豚の頭が台に載せられ、薫しべを刺して量り売りされ、そのまま持ち帰った」（J26 if 1931）。

当時は高級品だったという（地主が小作地を巡回するには必需品だった）自転車屋、「A百貨店」などがあり、日本人の生活必需品は、ほとんど里内で入手することができた。また、全国展開していた朝鮮人資本の百貨店の「連鎖店（チェーン店）」、「和信商会」もあった。常設の商店は朝鮮人、中国人の店も混在していた。

街外れに居住していたJ29 if 1919によれば、「渥美商会、朝鮮の人なんです。…モダンなお父さんでしたよ。…夏になると、浴衣を着て、外へ出て扇子で椅子の上であおいでる」。農機具を扱ひ、娘さんが隣に所帯もっていた。H医院（日本人）には、「(李) ネイソン」という朝鮮人の助手がいた。その近くに朝鮮人の内科医、家の前には、洋服屋。歯を治療してもらったのも朝鮮人の歯医者だった。「大



図 メンタルマップとしての大川里
(作図協力：大邑潤三氏)

川は、日本人たち少ないよ。」「孫さんという酒造りか、味噌づくりを
している人がいた」「餃子売っていて、今思えば中国人じゃないか
な」。和信の前には、金物店、市場の方へ漢方薬の店があった（J27
- m1926）。芸者も置いている保寧館（日本人経営）という料亭
の近くには、チヨゴリを着た「キーサン（妓生）」がいる「太平館」
（朝鮮人経営）があった。「チャンパン」や豚まんを売っていた中国人、
川向には、「ニーヤン」とJ30が呼んでいた畑を作り、野菜売りをし
ていた中国人もいた。

大川の日本人たちは、朝鮮の冠婚葬祭にもよく出会っていた（J26、
30、J31 - f1930）。結婚式を障子に穴をあけて覗き、華やかな
棺にとりすぎる泣き女の姿、葬儀の装束を説明した。反対に、日本人
の葬式も、伝統的な野辺送りが行われていた。J26の祖父の葬儀の写
真には、四ヶ花を（経緯は不明だが）朝鮮の子ども（学校にいないの
で、朝鮮の子どもとわかった）がもって参列していた。大川神社では、
春、秋の祭りもしたが、その山には正月の「ケンマケンマ（韓国の村
祭りの道具を指している模様）」がある小屋があり、旧暦に、「ケンマ
ケンマ」を鳴らしながら、練り歩く姿もあった。⁽²²⁾ 町の中には、所々に
「ギツコンバタン（ノルティギという板跳び遊びの道具と思われる）」
がおいてあり、日本人も遊んだ。

(2) それぞれの大川

このような多民族が混住する町で、個々が記憶する他者との関係
は下記のとおりである。へへは、親の職業を示している。いずれも、

併合まもなく、当地に定住した家の二、三世の人々である。

事例一 J25 - f1818 学校職員・主婦（地主）

父親は、ハワイの大使館に勤務していたが、病気で退職し渡朝して
いた。鰲川里の干拓地や各所に農地を所有し、一〇〇人ほどの小作に
委託していた。六歳上の長兄から朝鮮生まれで、台帳からも一九二
年〜一九一七年頃には大川に移住していたと思われる。⁽²³⁾ 大川の自宅で
はたばこ屋も営んでいた。インフォーマントの中で、朝鮮人と親しかつ
たと答えたのは、唯一J25で、隣家の李K一家との関係だった。

李Kは、「糶摺り屋（精米所）」を営み、（後述のJ27 - m1926
によれば）「地元の三大金持ち」の「両班」であった。⁽²⁴⁾ J25の家とは、
裏口から往来するような仲で、収穫した糶の精米や販売も委託してい
た。解放後英語教師になったという娘さんとも、一九七〇年代以降、
訪韓した際も「〇家の娘が来たよ」といって立ち寄り寄る間柄だったとい
う。（他の朝鮮人はという問いに）李Kの弟李Sの名前を挙げた。

それ以外、店子であった中国人の家に行くときよく声をかけられ、ご
ちそうしてもらって、「コマプソ（有難う）」と言って帰ってきた。ま
た周辺の各村にいた小作たちが年末年始の挨拶に何かを持ってくるの
で、酒や餅など振舞って相手をしたりするうちに、朝鮮語もできるよ
うになったという。一九七三年、戦後初めての大川訪問記には、半分
韓国語で解らぬまま旅をしたとあることから、⁽²⁵⁾ それほど流暢ではな
かったことが推察できるが、以下登場する郵便所職員「林さん」や、
日本人の店にいた被雇用者たち、「渥美商会」や「代書人金サイキの

息子さん」とは、再会を喜んでいることから一定の名前を認識する顔なじみが存在したことはわかる。

事例二 J27-1m1926 〈瀬戸物・金物店〉

両親は、共に山口県熊毛郡出身で、奉公先の群山の陶器屋で知り合い結婚。暖簾分けをして大川で開業した。両親の渡朝時期は不明だが、五人兄妹の年齢から一九一〇年前後と推測している。

隣家には李Kと並ぶもう一人の「金持ち」の「呉服商」の金S家があった。ただ、具体的にどのようなものを売っていたか、店に入った覚えはあるが、あまり記憶にないという。また、J25の家と李家のように、日常的に家を往来する仲でもなかった。旧正月の「トック（朝鮮式雑煮）」は、隣家からもらったり、J27の家でも朝早くから餅をついて迷惑だからと持っていたりしたが、それ以上の付き合いはなかった。息子は大田中へ行っていたと思うが、兄と同学年くらいだったので知っている。街では、学校などで文房具を注文する際には、朝鮮人の店に注文するなど気を使いながら生活していた。ほかに、朝鮮人といえば、住み込みのチョンガー（独身男性）の店員がいて、ハワイ帰りの伯父の隣に部屋を設け、家族と一緒に寝食を共にしていた。二人ほど変わったが、最後の人は徴兵に行った。「オモニ（既婚の女中）」はいなかったが、キムチを漬ける時だけ近くの人を二人ほど雇った。食事ではなぜか日本の漬物ではなく、いつも朝鮮漬けだった。

事例三 J30-1f1931 〈写真屋〉

父親がJ25の母の弟にあたる。フィリピンから吉岐に帰郷中に、姉に誘われ渡朝したという、異色の経歴の持ち主である。J30家族が親しい付き合いをしていたのは、やはり李K家で、正月には数種類の餅（あんこ餅、黄粉など）をつくると李家に届け、旧正月にはあちらから朝鮮餅が沢山届けられた。招かれて食事をすることもあった。J25の家族を通して親しくなったと思われる。李の息子は在学中に、国民学校の高等科に来ていた。ライカのカメラをもつ父親をスパイと言われ、馬乗りになって襟元に雪を入れケンカをしたこともある。すぐに李夫人が家に来ていて、「J30ちゃん強いね。うちの子冷たいって泣いて帰って来たよ」といわれた。母親に理由を問いただされたが、時局柄父親がスパイだと言われたなど口に出せず、泣いた思い出がある。

また、隣には、金さんという蒲鉾屋の四大家族が暮らし、「フォークナ」という子がいた。娘は「キチベ」と呼んで弟が良く遊んでいた気がする。家に遊びに行くと「何と云うかはわからない」が、銅（真鍮）のような食器に真っ赤な唐辛子の汁（おそらくチゲという鍋物）を汗を流して食べていたのを覚えている。外食はしたことがないが、市場でも同様のものを食べているのを見た。よく遊びに行っていたわけではないが、「隣だからやっぱり声掛けてくるわけ、元氣」とか。だから「金さん口今」なんていうと、J30ちゃんおいでなんて言っただけで、蒲鉾をくれたりした。

事例四 J 26-1-1931 〈郵便所〉

祖父は、日本の郵便局に勤務していて、一九〇六年に慶尚南道統営「郵便所」へ派遣され、一九一四年、すなわち道庁移転の時期に大川郵便所所長となって定住している。²⁶⁾

J 26がよく出会う朝鮮人は、基本的には家の中にいる人々だった。郵便所には、五人ほど通いの朝鮮人局員がいた。解放後に「郵便所」を継承した局長代理の林ソウインと交換手の朴エイギョク（一〇代後半〜二〇代前半くらいの女性）などみな普通学校高等科などを出て日本語ができる人だった。弁当だったので、食事は一緒にすることはなかったが、宿直があり、夜ごとそこに集まる人々がある遊び（説明からユンノリ・韓国式双六、チェツチギ・足でおもり付の羽を蹴る伝統的遊びと思われる）を覗きにいったりした。また、住み込みで、食事も家族同様にしていたチョンガーもいた。母親も共働きだったので、オモニや「親指が少し欠けていて、丸顔で立派な髭を生やした愛想の良い林書房」という片言の日本語を話す風呂焚きの男性、「カナナ」と呼んでいた同じ年頃の妹の子守もいた。いずれも通いの使用人だった。カナナは、髪の毛を一本に結ってチョゴリを着ていた。藍浦（隣の面）の山の下に家があってそこから通ってきた。遊びもしたが、頭の上をシラミが行ったり来たりして、「カナナはシラミの親玉だ」といってケンカにもなり母親に「かわいそうな、家の子だからいじめはだめだ」と戒められた。正月の餅つきはヨネギという人が、二、三人連れてきてうまくついでくれた。「すぐく日本語のうまい人で」「うまくて、面白くてね。日本人のような人だった」。

もう一つの出会いの場は、国民学校に通う生徒だった。「下の名前は知らないけれど、リンちゃん」と呼ばれていた郵便局の従業員林ソウインの息子が高等科に入ってきて遊んだりした。また、製糸工場のBさんの家の横には、中国人の「洋服を売る人」がいて、そこに「フーさん」という女の子が「なんだか知らんけど私たちの学校に」通っていてよく遊んだが、「いつの間にかいなくなっていた」。遊びに來いと言われて行くと店の裏に大きな家があって、そこに足の凄く小さい（纏足をしている）母親がいて、硬い支那パンをくれた。梅ちゃんという朝鮮人もいた。

4 大川の植民地経験

(1) 身体化する朝鮮と潜在化する帝国

かつて、梶村秀樹がとりあげた在朝日本人三世の作家村松武司（一九一四年京城生まれ）は、朝鮮通のように語る外祖父が、朝鮮人何某と名前を挙げて批判することがないことが、実際には朝鮮人と交わることがなかった証拠でもあり、また外祖父が具体的な他者を語っていないことに気づいていなかったと指摘し²⁷⁾、その後の在朝日本人の二重都市論（分離居住論）に大きな影響を与えている。植民地下の文学や知識人の随筆に朝鮮人の姿が現れないことが、被植民者を無視して暮らす植民者の傲慢さの表れとされた。²⁸⁾ 具体的な人名を挙げて近隣関係を説明する大川の人々は、一見朝鮮の人と親しい関係があるようにみえた。また、J 30のメンタルマップには、車恩貞が研究対象とした京城居住者の地図とは異なり、朝鮮の普通学校も省略されずに描か

れ、河豚にあたった夫婦を囲み、町の人が大騒ぎする事件を記述するなど、朝鮮の人や生活が意識される存在だったことはわかる。地図に「ナムジャンテン」とあるのは、沿岸にあった木場の意味の「ナムジャント(나무장터)」と呼ばれていた地名の音を記憶していたものと思われ、後述のJ29 e e f 1 9 1 9 が標準語の「干潟地(간척지)」⁽³¹⁾といわずに、漢字の誤読が由来とされる方言「カンサチ」を使うのも、J30や多くの子どもたちが「チョックン(ちよっと)待っててね」と朝鮮語と知らず使うのも、朝鮮語が彼女たちの身近にいかにか飛び交っていたかを象徴している。⁽³²⁾しかし、日本語が「国語」であり、「自分は朝鮮語が出来なかったので、おそらくカナナが日本語を話していた」というJ26のように、「日本」であるために、朝鮮語を話すなど考えもしなかった多くの二、三世たちにとっては、食べ物の名前(「チゲ」や「ノルティギ」(韓国版シソー)など)その正体は、戦後七〇年たっても不明で、筆者の想像以上に多くの朝鮮の風俗を見ている大川のインフォーマントの人々に、朝鮮文化を知っているという実感は希薄であった。

人々が、その言葉を朝鮮語と気づかなかったように、日本人の植民地主義的感覚もより潜在化していたことが、その日常語から感じられる。「ヨボ」という蔑称は、「相手に面と向かっては使わない」言葉だったが、日本人の中では浸透していた。未婚女性を指す「キチベ」、「チャン(清)コロ」に由来すると思われる「チャンパン」、台湾で使われていたという「リーヤン(車ひき)」の変形とおもわれる「ニーヤン」などは、蔑称であるという原義は忘却され、ただ娘や中国製の焼き

菓子(現ホットク호떡)、中国人を指す言葉として使われていた。また、正確な記憶が判断ができない「ネイソン」「フォクナー」は、音として覚えた朝鮮風の名前であったが、それらは朝鮮人の店の人だった。日本人店舗の従業員は、一九四二年の創氏改名以前でも、「リンソウギョク」など一見朝鮮風だが、本名の日本語読みで呼ばれていたのは、他地域と同様だった。他地では「太郎」など全く日本式の名前で呼ぶこともあった。

民族意識、差別意識があつたか、親しかったかなどは、きわめて主観的な言説で、基本的には個人差であるといえる。しかし、一定の時代性も感じられた。先行研究では、在朝日本人二世たちは、朝鮮史家旗田巍(一九〇八年生)に関する研究に代表されるように、一世たちのような確固とした支配者意識がなかったとされる。⁽³³⁾しかし、二世でも京城女子師範で教員も務めた碓井隆次(一九〇九年京城生)によれば、一九二九年の光州学生事件以降に警察や総督府による学校への介入、指導があり、⁽³⁴⁾教え子世代(おそらく本事例にあげた一九二〇年代後半から三〇年代生まれの人々)には友情も感じられたが、自らの幼少期は異なっていたという。「大東亜共栄圏の指導者としての頭がこびりついていた」、「敗戦時に高飛車にふるまう」、「不遜な朝鮮人」と随筆に書くA百貨店の長男(一九〇八年生、厳密には六歳渡朝の一世)⁽³⁵⁾と一九三八年の第三次教育令発布以降小学校低学年である「内鮮一体」世代とは、その語りには差異がみられた。三・一独立運動(一九一九年)間もない平壤の朝鮮人街居住者は、隣家を無視していたという回想録もあるが、インフォーマントの時代の大川では、日常

は良好な関係を結んでいたように思われる。今回は、街に居住していた韓国人には出会えなかったが、近隣の青羅面から時折大川里に買い物に来たという李H（一九二五年生、農業）は、日本人の店も利用し、街の仲も悪くなかったと認識している。日本人同士の付き合いも「あそこは、両班だし、あそこは金持ちだから、ちよっと」というように限定された家同士のものであり、朝鮮人と日本人の場合も、一見都市的近隣関係にみえた。しかし、確井も一方で解放まで「実質的な冷戦」は常にあったと回想しているように、大川の例でも、微妙な緊張感があったように思える。J27の場合、田植えに行く際、水を民家で貰うためと「悪口を言われてもキャッチできるくらいの朝鮮語」は身につけた。住民同士気使いながら生活していたと述べていたが、朝鮮人と日本人が付き合うことはまれで、「互いにノータッチ」、摩擦を起こさないようにしていたともいう。三分の一が朝鮮人であった大田中学に通いながらも、（仲良くしていたが）両者が親しくすることは、「普通のことではなかった」と考えていた。事例にはないが、総督府の技師の子どもであるJ23・f1929も、父親は部下を食事に招いたりしていたが、基本的には官舎内の日本人との付き合いで、日本人は相対的に朝鮮人に差別的だと感じていた。また、何よりも多くの人々が、朝鮮人と日本人は「悪い関係でもなかったが」親しい付き合いがあった」とは思っていないかった。

三 農村から見た他者像

1 「マイノリティ」としての植民者

そのような両者の曖昧な付き合いは、日本人が数的にはマイノリティであった農村地帯においても変わらなかった。「保寧会」のメンバーであるJ28・m1929が、尋常小時代（のち、小学校、国民学校に改称）、一九三七年四月～一九四二年三月まで暮らした周浦面保寧里は、数の上では、圧倒的に朝鮮人が多い中、数世帯の日本人が混住していたムラである。大川から約一二キロ離れ、干拓地主の正井瀧太（一九四町歩所有）⁽³⁸⁾が、居住していたことでも知られる。市誌には、正井が「朝鮮人農民を指導し、一九一八年以来開墾事業を経営、（中略）産米増殖計画が実施されると同時に、一九〇余町歩を完成させ、（中略）、地方の産業経済に貢献した」と紹介されている。⁽³⁹⁾J28とムラで当時を知る最も古老だというK22・m1927の話から、日帝時代の保寧里は約一一〇戸あり、四つの自然集落にわかれていた。二人が居住したN集落（約一〇戸）に日本人は、正井や普通学校（朝鮮人小学校）校長、すなわちJ28の家族、O商店（駄菓子屋・雑貨店）、S商店（荒物屋）、郵便局のK家があったという。K22の家には、普通学校の教員が下宿することもあった。里単位でわかる統計資料は少ないが、周浦面は一九三二年の統計で日本人は一三世帯であり、⁽⁴⁰⁾解放までそれほど変化がなかったと思われることから、半数近くが保寧のN集落にいたことになる。

事例五 J28-1m1929 〈教師・普通学校校長〉

父親の仕事のため、日本人が二世帯の地域で育ち、小学校一、二年は、普通学校に通った極めて例外的な経歴の人である。そのため、朝鮮人に間違えられるほど朝鮮語は流暢であったという。両親ともに朝鮮語が話せた。保寧里にきた三年生以降は日本人の学校に通ったが、ムラでは、親しみを感じてもらえるので、朝鮮の人とは朝鮮語で話した。(当時のムラでの両者の関係は「内鮮一体だったので、特に差別もなく、仲良くやっていた」。ムラの商店には、日本人だけではなく、朝鮮人も買いに来ていたので、両商店の人々も、朝鮮語ができたのではないかと推測する。「金^{キン}さん」「崔^{サイ}さん」など、名前は呼ばないが、姓で呼んでいたと思う。しかし、ムラのなかで朝鮮語で話しているような風景を記憶していたわけではない。K22とは、家は隣接し、「近くには日本人がいなかった」ので、学校は違ったがよく遊んだ。妹が病気になった際、薬もない時代にうなぎを探してきてくれたことを今も感謝している。J28は、一九四二年から、大田中学(大田府)へ進学し、父親は論山へ転勤となり、一家は保寧里を離れることとなる。K22と再会するのは、一九七〇年代末の訪韓後で、今日まで家族ぐるみの付き合いは続いている。

一方で「K22やその家族以外に、覚えている人はという問いに、「あまり付き合いがないから」記憶もないという。日本人がいなければ、朝鮮人とも付き合いが、いれば日本人は日本人、朝鮮人は朝鮮人同士でつきあった。まわり(周浦面)には、朝鮮の子どもはたくさんいたが、学校が違ったので、遊ぶこともなかった。(おとな同士はという問い

に、「一緒に栗拾いにいったり、魚とりに行ったりする人は、二、三人はいたようだが、日本人と付き合い合う人は、「教養のある、日本語ができる人」。そうでなければ、近づいては来なかった。日本人と話そうとする人は、日本語ができることを一つのステータスのように感じている人にも思えたという。校長という立場もあつたらうが、周囲にいたのは、一定の階層の人々であつたと思われる。K22は、隣家でもあり、例外的であつたようだ。K22に関しても、嫁いだ姉は大阪で暮らし、着物で帰郷することもあつた。解放後ではあるが、兄は道庁に勤務し、兄嫁も教員で「なかなかの両班」であつたことを付け加えた。

事例六 K22-1m1927 〈農業〉

韓国人のK22も、両者の関係については、同じような見解であつた。ムラの日本人と朝鮮人は、仲良くやっていた。大人同士と一緒に遊びに行くほどではなかったというのも、J28と共通していた。どの家にも誰がいたということは語つたが、それ以上の話はなかった。

正井については、家は自作農であつたため直接関係はなかったが、大詔奉戴日に学校へ来賓として訪れたことを記憶している。「石にかじりついてもこの戦争(「大東亜戦争」アジア太平洋戦争)には勝たなければならぬ」と挨拶するのを聞いて、「あまり学のある人だとは思わなかった」。しかし、夫人は、達筆で、会計などすべて家のことを支えていた。正井は干拓をしたが、田の面積が広くなると水の活き良いが強くなって、崩れることがある。しかし、政府から援助をうけていて、修繕費も出された。「日本人の所で農家をすれば失敗がな

かった」。当時小作をしていた家は保寧里には三割ほどいたが、ほとんどが正井の小作だった。戦時下では、食べ物がなく、食事をさせてくれと物乞い(구걸)に来る人たちがいたが、このムラの人ではなかった。ムラには、それほど貧しい人はいなかった。普通学校は義務教育ではなかったので、月謝が必要、七五銭、二人目からは五〇銭だったか、人々は鶏や豚も飼育し、それらも売ったりしながら子どもを学校へやっった。K 22の家では、五人の兄妹すべて普通学校は通った。

J 28は、「朝鮮人だとか、日本人だとかそのような意識なく過ごした」「内鮮一体」だったことをしばしばその理由として挙げた。しかし、朝鮮語が流暢なJ 28一家でも、大川同様、特殊な階層の人とのネットワークが中心であることには変わらなかった。また、筆者に対し、他でもそうではないのかという問いに、「差別的だったという人もいる」と述べると、引き揚げ時、各戸へ挨拶廻りをして帰った人もいれば、日頃抑圧的な態度の人が苦勞して帰ったことを噂に聞いたとも述べた。保寧里は、三割ほどが小作であるが、K 22の話から、比較的裕福なムラであったことが推測される。また、ムラで調査をした保寧市の郷土史家たちによると正井に対する評価も、悪くはなかったという。解放後面事務所勤めていた崔H(一九三九年生)は、正井に対し、村人が建立した「頌徳碑」があったことを覚えていた。保寧では、小作争議はなかったという。しかし、K 22の正井や日本時代への評価は、無条件「貢献した」ということではなかった。それは、総督府の援助があったたためになしえた成功だとも考え、崔Hは、碑の建立の理由は

知らないが、「おそらく被害を与えなかったから」と説明した。またK 22は、「今は、生活に困っている人がいたら、政府が助けてくれるが、当時はそんなものはない。だから、物乞いをして生活する人がいた」ことを付け加えた。正確には、極貧の人には配給があったが、K 22のように、恵まれた自分とは異なる境遇の人に言及する韓国人インフォーマントには度々遭遇した。

2 地主と小作

村落において関係が深い、地主は小作にとつてどのような存在であったのだろうか。J 29一家(以下M家とする)の小作が多かった周浦面高亭里、および松鶴里の事例を検討してみる。

J 29姉妹(次女eと五女y)の祖父は、一九一四年に京城黄金町居住時に、大川から約一二キロ離れた高亭里の四八町歩の干潟を入手し、干拓事業を始めている。併合後の平均的地主の所有が約三〇町歩といわれ、正井ほどの大地主ではないが大川では有名であった。改築されているが、二〇一五年現在、二階建ての日本家屋が一部残っている。遺族所有の小作人名簿によれば、高亭里、松鶴里で、七〇名ほどの小作がいた。一家は、父の代の一九一八年、おそらく教育のために、大川里へ転居している。J 29eの記憶では、この頃には干拓事業は、ほぼ終了していたようだ。しかし、両親が相次いで亡くなったため、一九三九年、J 29eが二〇歳の時に、母方の叔父等に農地を託して、嫁いだ長姉以外、姉弟たちと神戸へ引揚げている。

事例七 J 29 e i f 1 9 1 8、J 29 y i f 1 9 2 6

祖父が「栓をし（締め切り開墾）埋め立て、父親の代で十年ほどかけて塩抜きをした。農地を作るのが大変だった。「道庁から補助金が出て、…お米は、一等米でよかったらしい」。

干拓が終わった後の父親は普段は鳥撃ちに行ったりしていた。収穫時だけ現地に行くので、崔丁という人に農地の管理を任せていた。崔丁は優しくて良い人だった。その弟（崔G）は、普通学校を卒業して、日本語が上手だったので、通訳のような役割をした。

父親は五日ごとにある市日に、小作人が（村から）出てくると、事務的なこと、つまり金の貸し借りで忙しかった。「一年くらい収穫して、半分くらい地主におさめても食べられないから、足りない分をまた父親が貸すことになる」「小作人がお世話なるといって、借りても何もできないといって、卵を糞でつったものをもって来る。…そういうものが、山積みになっていた」「…一年間やっていけないから、面倒みていたの。生活費は出してたわけ。小作人は本当に切っても切れない仲。」だった。約三〇年ぶりに訪問した際には、駅に多くの人々が迎えにきていた。ムラを訪問すると、海水を堰き止める水門には、「M農場」という文字が残されていた。私家版の随筆に五、六人の小作人の写真が掲載されている。

J 29 姉妹が語った当時の情景は、次に示す崔丁の息子 K 32 とその親族で小作だった K 39 とある面一致していた。二人は父親同士が従兄にあたる。解放時は各々一五歳、十歳で、松鶴里の簡易学校（二年制）

等にも通っていたが、特に後者は、戦時下の供出のカマスづくりなど六、七歳になると農作業もよく手伝い、就学期間が長かった K 32 より M 家のことをよく記憶していた。父親や古老たちがよく話していたようだ。物心ついた頃は、J 29 の叔父や義兄（大川に嫁いだ長姉の夫）が代わりに管理していた時代である。彼らの苗字も、韓国語読みで記憶している。一九七七年に J 29 たちが訪韓した際も K 39 はムラで会って案内もしている。

事例八 K 32 i m 1 9 3 0

小作人名簿をみて、ほぼ全員を把握していた。干拓以前は、それほど田畑がなくて、貧しく暮らした。田ができて余裕ができた。八代前から居住し、祖父の代から、M 家の手伝いをしていて、叔父と祖父が最初管理し、祖父の死後父親が引き継いだ。生活できない人にお金を貸したのかは知らない。大川の M 家へ父親も行ったことはないと思う。中学進学まで、本人は、街も遠くへ行ったことがなかった。松鶴里の簡易学校（推定九歳）入学、三年生で保寧里の普通学校へ編入し、一九四五年に新設の大川中学へ二期生として入学している。保寧里も大川も各々一二キロ、片道三、四時間かけて徒歩で通った。遠くへ通う人はいなかった。ムラに、同年齢が、一五人ほどいたが、中学へ進学したのは、K 32 のみだという。日本へ徴用され死んだ人もいる。簡易学校には、二十歳くらいの人も通っていた。家には、蓄音機や自動車もあり、「多少良い暮らしをしていた方だった」。小作地は二三マジキ（一マジキは二〇〇坪）だった。

大川には、A商店が駅のほうにあった。百貨店という記憶はない。M家は街はずれにあった。Aの父親が商売のためにと、農地なのに道路を作ったといつて、怒って人々がデモをしたという話を聞いた。農業をしているのに、海水浴へ行く余裕などなかった。学校時代に水泳に行くこともない。韓国人は、(J27の隣の金家なのか)金Uが、金持だった。明治大学を出ていた。富裕層の息子が多く入った。勉強をしないので、卒業はできなかったが、黒いマントを着ていた人が沢山いた。李Sのアボジ(李Kのこと)も金持ちだった。(日本人と朝鮮人はどのような関係であったか?)、「遠くにいたのであまりよくわからない」。当時は、日本がどのような国なのかとか、将来など考えもしなかった。中学だから、一生懸命通っていただけだった。

事例九 K39 m1935

今生きていたら一〇〇歳ぐらい(二〇一五年現在)になる古者たちの話では、幼いころ、当時珍しい木製の自転車にのって「Mさん」(J29の祖父か)がくると、タイヤに穴をあけて、シュッシュと空気が漏れる自転車を追いかけて喜んで走ったのだという。干拓はハラボジ(祖父)の時代から、手伝っていた。「Mさん」は金持ちで、「車もなく、耕運機もない時代だから、チゲ(背負子)で、人力で埋め立てたんです。あの人たちは、個人で埋められるものはすべて埋めたよ。」労賃は、現金で支払われたと聞いている。

小作地は、七マジキ(M家記録では八マジキ)。「Mさん」によく思われたら、田は良いのを与えられるが、信用も特になければ、塩水も

あまり抜けていなくて、稲も死んでしまうような土地になる。：当時は肥料もないから、一マジギ一石(石)、脱穀して八〇キロ)。そうでなければ、一・五石の収穫だった。だからとても大変だった。現在は四、五石とれる。

埋め立て後は、普校出身の崔Gが倉庫で脱穀を請負、管理していた。崔Jがその横に大きな家も建てた。「打作マダン(脱穀の作業場)」をM家が準備していて、収穫物はそこへもっていく。百束の稲穂を、稲穂十本に一つ抜いて、稲束もごまかしてないか調査する。(小作料は)半打作。五〇対五〇。監視がない間にそっと、そうじゃないと飢え死にするので、脱穀をする前のこぼれた稲を踏んで、地主が知らないうちに隠したりする。：監督だった家の人が稲を盗むが、親戚が頼んでも絶対にくれなかった。：当時は秋収穫をしても残るものがない。：Mさんへ金を「前借り(日本語でいう)」して食べて、農業して、(再び)返済する。それでも足りないので全部は返せない。：借金も担保があれば、貸すがそうでない者は借ることもできない。

解放時、布団もなくて友達は供出のカマスに入って寝るくらいだったのに、崔JらはMさんの家へ行って、布団や毛皮のついた防寒帽などを山ほどもらってきていた。解放後、その人たちが、M家の碑を地下に埋めてしまったので、あんなに世話になったのにと村人が陰口をいった。

〈Mさんたちについて、村人はどう思っていたのでしょうか?〉Mさんを悪くいう人は、一人もない。(なぜですか?)被害を与えなかったから。(そんなに大変な暮らしなのに?)：自分たちが借りて食べ

たものを返せということ、Mさんじゃなくても、返さなければならぬことは皆一緒。(Mさんの)農場で生活しているのに、悪口を言う人はいませんでした。：

しかし、このまま、十年日本が韓国を管理していたら、韓国人の土地は、一つも残っていないと思うよ。みな、借金のかたにとられていたと思う。

3 重なりあう風景・異なる語り

地主が苦勞して干拓したこと、崔J・G兄弟という管理者がいたこと、小作が貧しく借金をしていたことは日本人と韓国人、地主と小作の記憶は、一致していた。ほかでも、解放後嫁いできた崔Gの夫人は、狩猟に来るM家のことを聞いていた。小作料の納入法等は、事例一のJ25やK32の説明も同じだった。大農場が多い群山では、割合が七対三と地主の取り分が非常に高いという言説があるが、地域によって多様で、忠南地方では、五対五、両者の話から半打作(刈り分打作法)という朝鮮の標準的納付法だったようだ⁽⁴⁵⁾。

異なる点は、崔Jたちが埋めたという石碑は、J29たちによれば、守って別の場所に移したと思っていた。訪韓の際水門に銃痕があったが、アメリカ軍が攻撃したとJ29は聞いたというが、K39によれば、解放直後に人民軍が侵入し、破壊しようとした跡だという。改築の際に壊そうとしたが頑丈で残った。J29が想い出深く話す崔兄弟は、M家に恩恵を受けた少数の人々と考えられていた。その学歴や「そんなものがどこにある」とK39が冷笑した蓄音機や自転車といった高級品

を所有することから、K32の家は本人の弁どおり「比較的豊かだった」ことは確かだろうだ。保寧里や松鶴里の近隣農地の収穫高が、複数のインフォーマントの話では、二、三石であったということから、K39の土地は確かに良い土地ではなかった。しかし、その理由がM家との関係であるのかはわからない。また、反対運動があった海水浴場への道路は、「内鮮青年連盟」として、朝鮮人青年団へも働きかけ、「大川発展のために」とA商店の(父親ではなく)長男が奔走し一年足らずで開通したという日本人大川「開発」の象徴でもあったが、周辺の農民にとっては、異なる評価があったことがわかる。

しかし、最も興味深いことは、J29やK39双方が、小作の貧しさや相互の関係を既存の経済原理の一部としてとらえ語っていることである。M家の定期市での金の貸し借りは、一般的に地主が高利貸しであり、むしろその利益が小作料よりも有益であったと指摘される状況と類似しているが、K39は、M家をそのような直接的に被害を与える人とはとらえていない⁽⁴⁶⁾。一方で、いつか土地がなくなるといように、「日本」という圧力が自分たちの生活にあったことも感じていた。

4 民族の記憶の乖離と交錯する他者

また、地主の話に、織り交ぜ語るのには、戦時下の供出の話である。

「Mさんに小作料を収めて、それを日本の本国にもっていくのか、どうかは知らないけど、朝鮮人は別に供出の配当がありました。田がいくらあれば、供出の配当があつて、出せないと毎月持ってい

れる」

朝鮮半島においては、一九三九年に米の配給制が始まる。農村の場合には極貧層を除いて穀物は基本的には供出のみである。日本人も同様である。小作料とは別途、面から割り当てられた分の米や、軍服用の綿花を食糧の代わりに耕作し供出するという国策であった。各田畑の平均的な収穫量を把握している面の役人や村落内の監視者が、消費分を除いて収集するといわれたが、実態は、自然災害による不作があつても、収穫量をはるかに超えた供出が求められたといふ⁴⁹。食糧不足で必死に壁や土に隠した米を根こそぎ持つて行ったという戦時下の体験は、米の収奪の象徴的語りである⁵⁰。インフォーマントたちによれば繊細な条件によつて収穫量が激減する綿花の割り当ては、食糧難に拍車をかけたといふ。もちろん、供出の負担感も、農地の規模、収穫量や家族数によつて当然差がある。インフォーマント全体の中でも、咸鏡北道会寧郡で水田だけで三千坪（二町）所有していた地主の人は、税込み二十五%の供出は、楽だったと述べていた。しかし、松鶴里でM家の小作で一三マジキ（八・七反）の田があつた千S氏夫人（一九二七年生）は、七人家族で何とか食へることができたが、供出でなくなる⁵¹と、外来米や麦、キビ、大豆粕（油を搾った粕を別号）を面が配給してきたといふ。大豆粕は、ご飯に混ぜて食べるとめまいがした。自作農で夫（次男）が尋常高等科を出ていた松鶴里の最長老（二〇一五年現在）だったK161f1926は、同じように「食べられないものも食べた」といふ大豆粕の記憶や、嫁入り布団が破れても綿花は皆持つ

ていかれ、繕えず、どんなに寒かつたかという戦時下の苦勞を語つた。ある程度生活可能であつたと思われる家庭でも困窮した⁵¹。その他各地農村の韓国人インフォーマントから、同様の話を聞いた。

植民地期において、米の生産量は増加しているが、日本への移出も増加し、朝鮮人の一人当たりの消費量は、一九一〇年よりも減少、雑穀が増加していたことは既存の研究で指摘されてきた⁵²。一方、一九四〇年代の総督府の役人の記述には、内地から満州への肥料、朝鮮から内地への米の移出、代替として満州から雑穀や大豆粕を朝鮮へは供給すればよいことなどが記述されている⁵³。朝鮮人は、「大豆粕を（好んで）食つていた事実を知つていた」ため配給したといふ⁵⁴。冒頭の不⁵²二農場の遺族と類似した言説である。雑穀を食へていたことは、風景として一致しているが、その意味は異なつてゐる。インタビュウの中で、白米を食へていたら持つていかれた、雑穀を食へざるを得なかつたとはいわれたが、大富豪以外、好んで食へたといふ人はいなかった。寒冷地では、雑穀しかできず、また、春窮時の対策として伝統的に常備されていたものである⁵⁵。肥料用の大豆粕は、論外である。一九二〇年以降行われた産米増殖計画も、「内鮮一体」が叫ばれる一九三八年以降も日本帝国内、特に「内地」に「平等に」米を「分配」するためのものであつて、必ずしも朝鮮の貧困層を充足させるものではなかつた。

これらの語りは、大川を含め、戦時下の食糧難はほとんどなかつたといふ在朝日本人のインフォーマントの記憶と対照的である。J29Yは、一九四四年に食べ物が豊富な大川へ疎開のため神戸から戻つてい

る。J26は、敗戦後日本に到着して出された大豆粕入りの握り飯を拒否し、大川から持参の白米を食べた記憶がある。都市の場合は配給であるが、平壤のJ11f1901は、終戦間際まで一月一人七升配給が続く、「植民地を困らせてはいけないので」内地より窮屈ではなかったと思っていた。解放後も京城鐘路小校長社宅にいたJ101m1924も、配給には困らなかった。一方、都市の韓国人インフォーマントはほぼ富裕層で、やはり米は入手していたが、在朝日本人と異なった点は、自らの土地を所有していたため、配給所からではなく自力で米を調達していた点である。これらの記憶の相違をここで詳細に検討することはできないが、特に、都市より生産地である農村が貧窮していたことがうかがえる。

重要なことは、本稿でとりあげたインフォーマントのみならず、他地域、あるいは日本人の回想録などでも供出による朝鮮住民の困難さが記述されているのは見かけない。農村のインフォーマントたちは、大地主であれば、不在地主となり、大川里と同様、進学で他地へ出て行き、論山に移ったJ28の父は、地主の友人たちから援助を受けて困らなかった。大川、保寧里にも暮らし、警察官の子どもで一九四〇年に同郡内の藍浦普通学校に半年在学したJ241m1931も、「農業が盛んだった場所だったからか、まわりの同級生は弁当を持ってきていた」と困難を感じていなかった。大邱で一九四三年から達城普通学校教員をしていたJ331f1921に尋ねてみたが、生徒たちは農家の子どもも多かったが、空腹であったとは思いますが、就学者はある程度余裕があったためか、食糧難は感じなかったという。厳しくなるのは

一九四一年頃からともいわれるが、一九六八年に行われた穀倉地帯全羅北道の東拓移民へのインタビューでは、周囲にいた（高亭里のK36とほぼ同じ規模の）小作農たちが、平時は米があれば麦等は一切混食せずにいたのが、戦時期には、松の皮まで食べ、中毒被害もでていたことを語っている⁵⁶。

四 コンタクトゾーンの中のすれ違い

在朝日本人の植民地観を回顧録などから分析した権淑寅⁵⁷は、混住地については事例がないとしつつ、現地社会と分離された自分たちだけの世界を構築していた日本人たちが出会っていたのは、オモニヤキチベのような安価な労働を提供する人々や特殊な階層（両班）に制限された朝鮮人であり、「いびつな人間関係から偏見や人種観をつくっていった」としている。植民地に対する日本人の非省察性は、分離居住のためであったとされるが、より正確にいうならば、出会っていないのではなく、出会った人が異なっていたことが、大きな要因であったと思われる。大川の場合も、コミュニティの記憶で、積極的なつながりとして語られるのは、李家のほか、大家と店子（J25と蒲鉾屋）、雇用户と被雇用户、地主と小作というヒエラルキーが介在する交流者が主だった。しかし一方で、街には多様な職業、階層の人々（医者、床屋、交換手、行商等）が混住していた。朝鮮人の歯科医や内科医がいたことを、日本人はどう思っていたのだろうかという質問に、J27は、「そうだね。当時は医者といったら、雲の上の人だったからな」と困惑し

た。普段は、考えもしないことであつたからであろうが、齒医者や日本人が藪医者で変わったが、内科は、日本人の医院へ通つたので朝鮮人の病院は全くわからないという。つまり、選択の順序はあつた。

大川のような地方の市街地の混住地においても、地理的空間とは異なる、生活ネットワークの二重構造は存在していた。すべての日本人インフォーマントが、既存の研究にもある通り、ここでも日常生活は極めて類似した「日本と変わらない」生活をおくっていた。混住地では可視化されにくい、大川でも、学校、料亭から祭まで、両者は、意識しなければ接触する必要がなかつた。多くの日本人の店は、周辺の農村地帯の消費生活の場というより、日本人同士が消費者であり供給者であることが中心だつた。陶磁器や金物を扱うJ27の店にキムチの甕や金属の食器など朝鮮の日用品はなかつたという。商店の仕入れも内地からだつた。一方、学校や公的空間でない限り、朝鮮人の家庭生活も全く朝鮮式であつた。「渥美商会」の主人のような、店名も日本式で浴衣を日常着こなす男性は、混住地ならではの風景かもしれない。しかし、大川は、料亭以外、外食する日本食堂もなく、双方が味わう異文化の食は、各地に混在していた中国人の「支那パン」や「チャパン」だつた。もちろん、日本人の店に電球や煙草を朝鮮人も買ってくる、市場の生鮮品も日本人は購入し、「お洋服は和信でしか買えなかつた」とJ30は記憶している。かたくなな境界があるわけでは無い。ただし、互いの店を利用することは基本的には「生活様式が異なるので」ほとんどなかつたと思つている（J29、J27、J31）。それは、大都市部住民だけでなく、郡部の村落においても同様だつた。人

口密度の差はあるが、事例にあげた大川の街も、保寧里も、隣人とはお裾分けをする、良好な関係ではあつたが、基本的には限られたネットワークの中で暮らしていた。これは、筆者がこれまで調査をした安眠島⁵⁸や扶余郡恩山里（二〇一五年調査）のような朝鮮人のムラに少数の日本人が暮らしている地域でも同様であつた。村において日本人と親しかった、あるいは会話を交わしていたのは、地元の精米所経営者や区長等一定の地位の人だつた。これは、日本語能力、すなわち学校進学の可能性と経済力には相関関係があつたためと思われる。

また、日本人と一般の朝鮮人の接触が少なく、多くの人が一定の距離間を縮めることがなかつたのは、この言語の問題も大きかつた。主たる日本人インフォーマントの世代は、国語としての日本語使用が当たり前の世代である。入植当初、彼らの親世代は朝鮮語学習者がいたようだが、安定した生活に入れば、「日本」の中で朝鮮語を学ぶ必然性がなかつた。「朝鮮語を話したか」という問いに、インフォーマントたちは周りができるので「必要がなかつた」と即答した。しかし、一九四四年度『朝鮮年鑑』⁵⁹によれば、「国語を解する朝鮮人」は、十六・六％に過ぎず、日本人が接した世界がいかに狭小なものであつたかがわかる。J25、J26、J30たちは、蒲鉾屋や洗濯をしてくれるオモニからご馳走してもらい、J30は隣の家の生活も垣間見ているが、それは小学校の子どもの頃のことだつた。「挨拶をするといらっしゃいと言われて家上がった程度」と本人は認識している。幼少期のコミュニティでの親しい他者との接触は、就学することで疎遠になつた。女学校や中学校進学は、地方であればあるほど、都市や内地で下宿生

活をすることになり、学校制度は、地域社会における両者の乖離に拍車をかけた。内鮮一体が強調される中、日本語が「国語」として浸透し、日本人は益々朝鮮人を知る機会を失った。したがって、両者が語る風景は一致していたが、意味が異なった。

五 結び

韓国人の語りからも、日本人の語りからも、各々が描く植民地経験は、自らが行動し、出会ったごく一部の風景で、記憶は、極めて身近な生活実践で遭遇する人や事象に基づいていることがわかる。例えば、J27は、五歳下のJ30 if 1931たちと李Kの息子が同時期に尋常高等科に通学していたことを知らなかった。また、J26 if 1931は、J27の家と道一筋しか違わなかったが、彼の隣人の金家を記憶していない。数値的には混住地であるかもしれないが、人々の認識は、個々のライフサイクルと日常の実践における狭小な場のなかで形成されていた。統計的密集度、空間的「場所」よりも、人々の実践の中でのお会い、「場」の形成が、他者認識に大きな影響を及ぼしていた。言語の問題は、その実態を理解する上で想像以上に障害になっていた。他者への無関心が、植民者意識ともいわれるが、特にムラの女性たち、元小作の未亡人や松鶴里の古老もM家に関心はなく、日本人は高亭里にいたという程度である。「被害を与えるか否か」が、関心の基準であった。また、朝鮮人は、一方的に侮蔑されるだけではなかった。日本人に対し「ウエノム（倭奴）」や下駄を履く日本人を象徴す

る「チョッパリ（イノシシのあし）」という蔑称を使ったが、その意味を多くの日本人たちが、聞き取ることができなかったともいう。梶村が「経験的実感」とともに批判した引揚げ時の「善良な日本人」、「守られる日本人」の言説は、「襲われる日本人・朝鮮人」として、韓国・日本双方のインフォーマントの語りに現れた。運送会社で多くの人夫を使っていたJ29の親族は、人々の復讐を恐れ、妻子を残し早々に内地へ引揚げていた。高亭里の碑は、群山からきた抗日運動家によって狙撃された。「朝鮮人」「日本人」と一括りにするとわからないが、各々に名前を付けてみると、被害者は、厳しい言葉や暴力を振るったスノベリーな植民者であり、破壊行為の主体は、見知らぬ他者であり、具体的な要因が見えてくる。日常、多様な対人関係が結ばれる中、人々が他者を選別していたことがわかる。

京城からの帰還者にインタビューした車恩貞は、「あとがきに」、「フィールドワークによるインタビュー調査以前は、植民地の日本人のイメージは、唯一つ朝鮮人を暴力で抑圧する植民支配者だったが……実際にであった帰還者から聞いた話は、これまで聞いた話、考えていたこととは程遠い距離があった」と述べている⁴¹。この車の驚きは、抑圧や暴力だけではない植民地の日常が存在していたことを示しているが、それは決して平等な社会であったことを裏付けるものではない。K36や青羅の李Hも、日本時代の苦勞を訴えたあとに、身近な日本人との関係が良好だったことを述べた。国家と個人は異なるという植民地認識を曖昧にする言説は、被支配者たちも時には共有していた。しかし、K22が、自らの体験と異なるポジショナリテイの人が存

在したことを示唆したように、朝鮮人の生活は多様であった。一方日本人は、生活様式もライフコースも極めて類似し、経済的にも格差がなかったという分析もある⁽²⁾。医者や両班、学校で出会うエリート朝鮮人同級生たちと周囲の使用人たちに挟まれた日本人の認識は、おそらく「中間層」であり、植民地的優位にいたことは、日本に帰国するまで感じることはなかった。しかし、このことは在朝日本人が、戦後差別的な視線を受けたような特殊な存在であったことを主張するものではない。当時五千万の「内地」や軍隊に供給された米は、認識されないほどの「分配」であったかもしれないが、明らかに朝鮮の低階層から日本帝国内に搾取したものであるからだ。米の事例にもあるように植民地の構造は、個々の実感と必ずしも結び付けられるものではない。これまで植民地認識の問題が、在朝日本人の語り注目する時、常に差別や反省的であるか否かの人々の類型化にむけられていたことは問題である。また、差別意識や暴力的事象だけを取り上げることは、多様性に出会うとき、その植民地の構造を見失い、修正主義的な安易な貢献論を生み出すことになるからである。

本論では、在朝日本人からの側面が強くなり、韓国の人の語りからみる植民地期の複雑な日常性を描写するには至らなかった。別稿に譲りたい。

〔注〕

(1) 本稿では、植民地期の事項を記す際には、当時使用されていた「朝鮮人」「支那人」など今日では不適切とされる用語もそのまま使用することとする。また、実際には、韓国と表現する人もいたが、一九四五年以前に関しては、「朝鮮」に統一した。

(2) 梶村秀樹著作集刊行編集委員会一九九二『朝鮮史と日本人』（梶村秀樹著作集第一巻）明石書店、木村健二一九八九『在朝日本人の社会史』未来社、同二〇〇一『植民地下新義州在住日本人の異文化接触』戸上宗賢編著『交錯する国家・民族・宗教―移民の社会適応―』七三―九八、不二出版、高崎宗司二〇〇二『植民地朝鮮の日本人』岩波新書。なお、梶村著作集の在朝日本人論である「植民地と日本人」は、初出は一九七四年で、以下「植民地朝鮮での日本人」（一九七八）、「植民地支配者の朝鮮観」（一九八二）、「旧朝鮮統治」は何だったのか」（一九八六）である。

(3) 例えば 이수열二〇一四「재조일본인二世의 식민지경험― 식민지 세출신작가 들 중심으로」『한국민족문화』五〇、九九―一二二（이스ヨル 二〇一四）「在朝日本人二世の植民地経験―植民地二世作家たちを中心に」『韓國民族文化』五〇、九九―一二二）がある。また文化人類学者によるものに、崔仁宅の釜山地域からの帰還者に対する生活史調査 최인택二〇〇四「일제시기 부산지역 일본인사회의 생활사― 경험과 기억의 사례연구」『역사와 경제』五二、一一〇―一四七（日帝時期釜山地域日本人社会の生活史―経験と記憶の事例研究）『歴史と経済』五二、一一〇―一四七）。回顧録分析をした 권숙인二〇〇八「식민지 조선의 일본인― 피식민 조선인과 의 만남과 식민의식의 형성―」『사회와 역사』八〇、一〇九―一三七（權淑寅「植民地朝鮮の日本人―被植民者 朝鮮人との出会いと植民意識の形成―」『社会と歴史』八〇、一〇九―一三七、それらにインタビュー調査も行ったUCHIDA, Jun 2013 *A Sentimental Journey : Mapping the Interior Frontier of Japanese Settlers In Colonial Korea*. Lynn, Hyung-Gu eds., *Critical Readings On the Colonial Period of Korea 1910-1945*.

Vol. 4. 1052-1078などの主として大都市帰還者たちの非常に類似した生活も提示されてきた。

- (4) 梶村、註(2)二四六―二四八、二六五頁。拙稿二〇一〇「記録と記憶の比較から―朝鮮安眠島における植民という日常」『佛敎大学文学部論集』九四 三七―五六。また、近年の回顧録に西川清二〇一四「朝鮮総督府最後の証言」などもある。

- (5) 咲本和子一九九八「皇民化」政策期の在朝日本人―京城女子師範学校を中心に―『津田塾大学『国際関係学研究』二五 七九―一〇九。崔吉城編著 一九九四『日本植民地と文化変容 韓国・巨文島』御茶の水書房、崔吉城 二〇〇二『親日』と「反日」の文化人類学』明石書店。なお、崔編の原文韓国語版(『日帝時代 韓漁村の文化変容』亜細亜文化社)下巻には、多くの一般の人々のインタビュー資料が掲載されており貴重である。

- (6) 例えば、橋谷弘一九九〇「植民地都市としてのソウル」『歴史学研究』六一四
- (7) 註(3)イ、権、前掲書。

- (8) 김중근二〇一〇「식민도시 京城의 이중 도시론에 대한 비판적 고찰」『서울학연구』三八、一―六八(キムジョンケン 二〇一〇「植民都市京城の二重都市論に対する批判的考察」『ソウル學研究』三八、一―六八)、차은정 二〇一四「재조귀환자의 후루사토(고향)와 기억의 정치학―패전후 귀국일본인에 대한 민족지적 연구」(車恩貞「在朝帰還者の故郷と記憶の政治学―敗戦後帰国日本人に対する民族的的研究」ソウル大学校博士論文)は、町によって接触状況に偏差があったことも指摘している。ただし、今日まで清溪川を境に南北に分離するといわれることが多いが、植民地期の善生永助の調査(一九三三「朝鮮の聚落」前篇、朝鮮総督府、八四二頁)においては、川の南の「黄金町通りを界として、南部は内地人町、北部は朝鮮人町と称し得べく」とあり、キムが混住地とした黄金町がおおよその境界であることは示唆されている。

- (9) 日本人インフォーマントは、一九〇一年―一九四一年生まれまで、男性一九名、女性一六名(一世六名、二世二七名、三世二名)、主たる居住地は、本事例地以外、鎮南浦、平壤、清津、城津、京城、羅津、元山、扶余、巨文島、韓国人は、一九一九年―一九三八年生まれまで、男性二五、女性一六名。上記地域以外に、会寧、咸興、海州、載寧、定州、東草、利村、扶安、群山などである。詳細は、別稿に改める。

- (10) 安齋霞堂 一九三二『忠清南道発展史』湖南日報社
- (11) 田中市之助 一九二一(一九八九)『忠清南道産業誌』(韓国地理風俗誌叢書五二)景仁文化社、二五六―二六七

- (12) 「市に昇格の大川に憶う」『保寧会誌』第二号一九八七。親睦会である保寧会は、一九六五年二月二日に、「忠清南道保寧郡引揚者全国大会」として第一回会合を大阪府山中溪温泉で開催し、翌年第二回会合において正式に発足している。同年第一号を「会誌」とし一九六六年に発行。以後、名称は『保寧会報』、『保寧会』など変化しているが、以下は、『保寧』とする。会員高齢化のために現在は解散している。

- (13) 保寧市誌編纂委員会二〇一〇『保寧市誌』保寧市
- (14) 忠清南道保寧郡一九三三『昭和七年編纂 保寧郡勢一斑』忠清南道保寧郡
- (15) 森田芳夫 一九六四『朝鮮引揚の記録』巖南堂書店
- (16) 李圭洙「植民地期朝鮮における集団農業移民の展開過程―不農農場を中心に」『朝鮮史研究会論文集』三三、二〇三頁。
- (17) 註(13)前掲書。
- (18) 註(11)前掲書、二五五頁。
- (19) 註(13)前掲書。
- (20) 註(11)前掲、四八三頁。
- (21) J 30-1-f 1931は、J(日本人) 30(整理番号) 1-f(女性) 1931(生年)を表し、本稿ではインフォーマントを以下記号化する。mは男性、Kは韓国人を示す。性別や年齢が重要なファクタとなるためである。反復される場合には、適宜番号までを用いる。敬称は省略する。簡単なインタビューのみの場合は仮名にした。

(22) 日本人は、母国に墓を所有している人は、葬礼は朝鮮で行い、火葬にして日本に持ち帰ることが多かった。伝統的な野辺送りだが、街で行われたのは城津のインフォーマントにおいても同様であった。また、農村振興運動などで、朝鮮の民間信仰の調査が進められたが、村落祭祀に関しては、一九三八年の「国民精神総動員連盟」設立の頃、例えば「別神クツ」で有名な扶余郡恩山里では、一九三九年以降中止になっている(韓国伝統文化大学校崔鐘浩教授のご教示による)。筆者のフィールド地(現保寧市C島)では植民地時代にも変わらず行われていた。朝鮮総督府の巫俗調査等とその動向については、中生勝美二〇一六「近代日本の人類学史 帝国と植民地の記憶」風響社、一四一―一五三参照。

(23) 朝鮮における土地調査事業は一九一〇年三月―一九一八年一月に実施され、一九一二年二月に土地調査令の公布、申告により土地所有権が確立された。土地台帳には、地番とともに所有者の変遷等が、年月日とともに記されているが、冒頭の所有者欄には年月日が記されていない。J25の父親の名義のものは、無期入のものと共に一九一七年に朝鮮人より購入した記録等があるため、本文のように推測した。台帳も膨大であるため、見落としがある可能性があり、厳密なものではない。土地取得の時期と居住が正確に一致しているとは限らないが、台帳を基にした場合は、このような根拠で移住時期を推定している。

(24) 「両班(ヤンバン)」とは、本来は李朝時代の官職(武官・文官)を指す俗語であったが、植民地期には、日本人たちは地元有力者、あるいは、単純に富裕層をこのように呼んでいた。李Kは新聞によれば一九九〇年生まれで、普通学校増築時に九〇〇円の寄付をした(一九三六・三・七「東亜日報」、大川穀物商組合代表(一九二九年五月まで)、醸造会社も経営していた。また、弟S氏のご子息(二〇一五年インタビュー)によれば、三・一独立運動後に民族教育を目指して設立された同徳女高(京城)の創立者李錫九の親族でもあるという。どのような経緯で、李家が大川に暮らすことになったかは不明だが、J25の方が早期に定着している可能性が高く、名士同士の付き合いいで

あったのかもしれない。

(25) 「韓国訪問の旅」『保寧』8、一九七四 二七―二八

(26) 한국사데이터베이스(韓国史データベース) <http://db.history.sk.or.kr>、国史編纂委員会

(27) カナナは、カンナニ(갯남이、赤ん坊)が日本語化したものと思われる。京城など他地域では、幼い女中、子守は「キチベ 계집애」などの蔑称が使用されることが多い。また、書房は、本来は官職のない男性などと呼ぶときの接尾語。「林さん」といったニュアンスである。

(28) 村松武司 一九七二「朝鮮植民者―ある明治人の生涯」三省堂

(29) 例えば尹健次 一九八九「植民地日本人の精神構造―『帝国意識』とは何か」『思想』四、四―二七

(30) 註(8)車、前掲論文。

(31) 干潟の「潟」を砂の意味の「沙」と誤解し、「カンサチ(간사치)」といわれるようになったという説がある(韓国「国語生活百書」NAVER 사전 <https://ko.dict.naver.com/seonhn?id=600500>)。日本語でも朝鮮の標準語でもないカンサチが植民地時代に使用され、J29は、その言葉を記憶していた。干潟は、全羅道も含めた西海岸が中心であるため、保寧の方言であったのかは不明だが、同地出身の作家崔シハン(최시한)が、『カンサチの話(간사치이야기)』(二〇一七)を出版していることから、現代でも保寧では定着した言葉となっているようだ。

(32) ルボライター 沢井理恵は、京城育ちの母が、ハングルは読めず会話もできないが、カマニカマニ(ゆっくりゆっくり)、チョヨコン(少し)など会話に朝鮮語を織り交ぜ、日本人同士で話したと同様の経験を書いている。沢井理恵一九九六『母の「京城」・私のソウル』草風館。

(33) 高吉嬉二〇〇一『在朝日本人二世のアイデンティティ形成―旗田魏と朝鮮・日本』桐書房

(34) 確井の中学時代には、日本人のおとなが朝鮮人への横暴な態度を疑問視する風潮がなかったという印象をもっている(『京城四〇年』生活社、五三―八一)。それらに憂慮するのは通説の三・一運動よりは、光州学生運動以降であったという。「へたなことをすれば学校も教育的な責

任を問われる」状況に変化した。公的な変化が朝鮮観、学校同士の交流などに影響をもたらしていた傾向は、韓国人インフォーマントの語りでも感じられた。

- (35) 『保寧』 11、一九七七、一八
- (36) 佐藤俊男一九八四『他国のふるさと 朝鮮へ渡った他国の子供たち』創言社
- (37) 註34 碓井前掲書、七九―八〇
- (38) 韓国農村経済研究院一九八五『農業改革時 被分配地主 吳 日帝下大地主名簿』 韓国農村経済研究院
- (39) 註13 前掲書。
- (40) 註14 前掲書。
- (41) 『京城地方院検事局文書』(一九三七年一月十日) によれば、軍用馬糧の買い上げをするなか、穀物が順調に調達されているが「一刻貧農ニ対しては郡面当局に於いて、裸麦、満州粟等の代用が斡旋され：春窮期を無事経過スベシト認メラレル」(国史編纂委員會ホームページ資料 http://db.history.go.kr/od/had_187_1770) などの記載がある。
- (42) 『朝鮮総督府官報』第七二二号 一九一四年(二月二六日)
- (43) 浅田喬二 一九八九『増補 日本帝国主義と旧植民地地主制―台湾・朝鮮・満州』における日本人 大土地所有の史的分析』龍溪書舎、七七。
- (44) 一九七七年『高亭里のそよ風Ⅱ』がありがとうの気持ちを含めて』
- (45) 毎年の収穫高を折半する方法で、M家は刈取ったままで徴収する刈分小作制であったようだ。その際は、種子代は地主が負担し、地租は地主と小作で折半することが多い。それに対し、日本人地主の多くは、「定租法」という一定額を豊凶にかかわらず徴収する方法だった(註43) 浅田前掲書、七四)。後者は、日韓併合後、「搾取的に小作糧増収を図り」、農民の「奮起」を目指した方法であるとされるが、当然効果なく、農民は打租を歓迎した(京畿道一九三三『昭和五年調 小作慣行調査』京畿道産業部 一一六)。農村振興運動の中、化学肥料の導入が、経済的負担となったとされるが、事例地域では、堆肥を自助努力として

蓄積することが奨励されたに過ぎず、草木もあまりない海岸部であるため肥料もままならなかったという。

- (46) 『思い出の数々を追って』『保寧』9一九七五。このような日本人の「貢獻」の代表として挙げられる鴨緑江の赴戦江水力発電も、地元漁民や中国人クワリーへの暴力、犠牲のもとに成り立っていたことは、日本人労働者の語りの中で残されている(岡本達明 松崎次夫編一九九〇『開書水保民衆史第五卷 植民地は天国だった』草風館)。
- (47) 河田宏 二〇〇七『朝鮮全土を歩いた日本人農学者・高橋昇の生涯』日本評論社
- (48) 大地主の熊本農場では利潤の高さに小作争議があったことなど報告されており(威翰姫ほか二〇一〇『植民地景観の社会文化的意味―全羅北道ファホリを中心に』『韓国文化人類学』〈합한회기타 二〇一〇〉『식민지 경관의 그사회 문화적 의미―전라북도 화호리를 중심으로』『한국문화인류학』四三―一、四七―八八)、小作料納入方法や土地の条件もおそらく大農場の場合とM家では異なっていたと推測され、借金の貸与が同様な性質のものであったか、本資料のみでは不明である。
- (49) 樋口雄一 一九九八『戦時下朝鮮の農民生活誌 一九三九―一九四五』社会評論社 四四―四七
- (50) 『経済治安週報』第四六輯(昭和一七年三月二〇日)には、山の枯葉の下や、他者の倉庫に米を隠すことなどが一九四〇年以降、保寧郡下で頻発していることが報告されている。
- (51) 一九三九年に慶尚道達里で姜鋌澤が調査した資料から、階層別自給状況を分析した樋口雄一(註49) 前掲書 六二)によれば、上層では、一五石、中層で五石、下層二石と一戸当たりの平均米消費量を推参している。地域も年代も異なるが、千S夫人の家の収穫量は、彼女の記憶が正しければ、一マジキ二〜三石で、一三マジキ所有で、少なくとも二六石。小作料を差し引いても、一三石で、本来はある程度自給できたはずである。
- (52) 一九二二年の米穀供給量(約千百万石)のうち、朝鮮内での消費は九五・五%であったものが、一九三七年には、供給量は約一・七倍に

増加しているが、国内消費量は、六五・九%に減少、一人当たりの消費量も〇・七七石から、漸減し〇・五七石になっている。一九三八年に消費量が〇・七に反るが、朝鮮内消費量は、六割を切っている（呉浩成 二〇一三『일제 시대 米穀 시장과 流通 구조』『日帝時代米穀市場と流通構造』景仁文化社 一九八）。一九四三年には、旱魃で不作になり、供出量は、予定以下になるが、比率は、前年度四三・八%から更に一二%増の五五・八%になっている（李熒娘二〇一五『植民地朝鮮の米と日本—米穀検査制度の展開過程—』中央大学出版部）。

(53) 水野直樹編 一九九八『戦時期植民地統治資料』第六卷 柏書房 九七—九九、石塚峻 一九四四『決戦下の食糧問題と朝鮮』『朝鮮』第三五三号 一三一—一八、井上則之一九五六『朝鮮米と共に三〇年—湯原辰二郎半生の記録』米友会

(54) 註(49)前掲書、七九。

(55) 註(47) 前掲書、一四六—一五一。朝鮮の在来農法を調査した高橋昇によれば、二種類以上の作物を同時に栽培する混作法が一五世紀の『農事直説』などにあり、気候によりいづれかが生き残る雑穀栽培で、農民たちが春窮時に備えたくれた農法があったという。

(56) 戦後、総督府関係の引揚者が作った友邦協会関連者等に、朝鮮史研究者などが聞き書き調査を行ってきたが、本資料は、一九六五年東拓移民で二・五町歩の地主だった人物へのインタビュー調査のテープ起こし原稿。「全羅北道における営農体験談—朝鮮村の実情」『東洋文化研究』(学習院大学東洋文化研究所) 十六〇〇—一六四七

(57) 註(3)権、前掲書。

(58) 註(4)拙稿。

(59) 京城日報社 一九四三

(60) 註(34)確井前掲書。

(61) 註(8)車、前掲論文

(62) もともと中産階級の移住が多く、「生活不可能なもの、乞食その他」は五百人に過ぎず、経済的にも突出した富裕者がいないことが特徴とされた(須恵愛子ほか一九三五「朝鮮に於ける内地人生活の考察」。

二)『緑人』三、七一—七六、ソウル大学校図書館蔵 <http://library.snu.ac.kr>。

〔付記〕

本稿は、文科省科学研究費19201054(代表崔吉城)、同25244044(代表植野弘子)、二〇一二年度佛教大学特別支援費、二〇一四年度佛教大学教員研修制度の成果の一部である。特に一年間韓国に滞在することができ、韓国人インフォーマントの方々へのインタビューも進展させることができた。また、保寧会をはじめ調査でお世話になった皆さまおよび関係機関に御礼申し上げる。

(すずき ふみこ 歴史文化学科)

二〇一八年十一月十五日受理

